

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 0 | はじめに
Intoroduction | 20 | 越路山神社をめぐる記録
The records of Koejiyama Shrine |
| 1 | 越路山神社の復元
Restoration of Koejiyama shrine | 21 | 30年前の越路山神社鳥居の写真
A photo of Torii gate of Koejiyama Shrine taken
30 years ago |
| 2 | 八木山橋
Yagiyama Bridge | 22 | この土地にねむる全ての者の魂
The soul of all who sleep in this land |
| 3 | 脱衣婆
Undressed women | 23 | 越路山神社跡地からの景色
A scenery from the former site of the Koeji Shrine |
| 4 | 死体の印(薬局の主人の死体)
A sign of corpse
(The corpse of the pharmacy store owner) | 24 | 破棄された越路山神社の鳥居の一部
A part of destroyed Torii gate of the Koeji Shrine |
| 5 | 政宗騎馬像
An equestrian Statue of Masamune | 25 | 忘れ去られたもの達の部屋
A room of forgotten things |
| 6 | へビ取りのおじさん
A snake catcher | 26 | 瓦礫の温泉
The hot spring of debris |
| 7 | 開拓小屋
A pioneer hut | 27 | 島崎藤村の歌碑(下―荒浜の瓦礫とインコ)
A monument inscribed with poem of Shimazaki Toson
(Below are “The debris in Arahama” and
“A angry parakeet”) |
| 8 | 越路山神社鳥居(上―テレビ塔)
A Torii gate of Koejiyama Shrine
(Above is “The TV tower”) | 28 | 荒浜海岸部から見える八木山・太白山風景写真
A landscape photo of Yagiyama and Mt.Taihaku seen
from Arahama coast |
| 9 | 動物園から逃げる動物たち
Animals escaping from the zoo | 29 | 死んだ金魚
A dead goldfish |
| 10 | ベニーランド・オープン時キャラクター達
The characters of the Benyland when its opening | 30 | 赤い帽子の男
The Man in the Red Hat |
| 11 | 45年前に動物園のトイレで会った少女像
The statue of a girl who met in zoo restroom 45 years ago | 31 | 怪獣人形
Monster doll |
| 12 | ネコの死体
A cat corpse | 32 | ヒト、ウミガメの骸骨
Human, sea turtle skeleton |
| 13 | 消え去る前の像・魂(青い人々／天使たち)
The statue before disappearing, Souls
(The blue people, Angels) | 33 | 山の奥で見つけた卵
The egg found in deep of the mountain |
| 14 | 檻の中の動物たち
The animals in the cage | 34 | 子供のころの自分の部屋(窓から太平洋が見える)
My childhood room
(The Pacific Ocean can be seen from the window) |
| 15 | 山奥の朝鮮学校
The Korean school in deep of the mountain | 35 | 八木山小学校校歌
Yagiyama Elementary School Song |
| 16 | サル山
A monkey mountain | 36 | 八木山本町一丁目8-13青野家での
昭和45年12月24日クリスマスイブの夜
Christmas Eve night, December 24, 1970,
at the Aono House, 8-13, Yagiyamamoto-cho
1-chome |
| 17 | 太古の海底の生きる生物(クジラ)
Living creatures on the ancient seabed (whales) | 37 | 昭和63年元日・初日の出
New Year's Day, 1988, the first sunrise of the year |
| 18 | 千代と仙台(千躰仏と仙人とTVタワー)
Sendai “chiyo” and Sendai (The thousand Buddha, a
hermit and the TV tower) | | |
| 19 | 野球と戦争(八木山球場をめぐる)
Baseball and War (About Yagiyama Stadium) | | |

- 38 八木山の家
My house in Yagiyama
- 39 八木山・大年寺山のテレビ塔
TV tower on Mt. Dainenji, Yagiyama
- 40 虫取り作文(小学一年生時)、
昭和50年代八木山昆虫分布図、虫取り三人組写真
Insect-collecting essay (first grade), 1975 Yagiyama
insect distribution map, insect-collecting trio photo
- 41 太白山(おどが森)
Mt. Taishaku (Odogo-mori)
- 42 八木山・青葉山・卒業制作
Yagiyama, Aobayama, Graduation Works
- 43 動物園から逃げたチンパンジー写真
Pictures of chimpanzees that have escaped
from the zoo.
- 44 3,11のひび割れ写真(自宅)
A crack of 3.11 (My house)
- 45 小学生時代の八木山動物園写生大会の絵
A picture from a sketch meeting
at Yagiyama Zoo when I was in elementary school.
- 46 越路山にねむる祖先
The ancestor sleeping in Koejiyama
- 47 アイヌ乙女
A maiden of Ainu
- 48 おどが森の巨人(ダイダラボッチ)
The giant of Odogo-Mori (DAIDARABOCHI)
- 49 おどが森の大蛇、石積み、生首
The big serpent of Odogo-Mori, Masonry,
severed head

0 はじめに

遠い昔に伝わる生出森(おどが森)の巨人伝説—ダイダラボッチ。岩を持ち上げ大地を揺るがし猛威をふるう—自然の力への畏怖。たび重なる災害、地震、津波にみまわれ続け、神を祭り(生出森山頂)、死者を弔う—「千駄仏」(当初は青葉山にあり、現在は、海から街への入り口であり八木山の入り口でもある愛宕山の大満寺に納められている—この地域一帯を千体・千代と呼ぶ様になる)。

近世になり、この平野部(湿地帯)へ伊達政宗がやってくる。仙人思想(世俗権力からの超越性主張)を標榜し、生出森(おどが森)—太白山、千体—仙台と改名。仙台平野を見下ろす山頂に築城(仙台城)、仙台藩の拠点とする。神を祭り、死者の霊が集まり弔う山であったらう越路山一帯は、この城の後背地とされ、伊達家の厳しい管理区域として封じられ立ち入り禁止となる。

この時期再び巨大な大地震がおこり平野部を大津波が襲う。

その復興事業の中で整備開発され水田地帯が広がっていく仙台平野。

その反面、様々なはずみが山の方へ集まり蓄積されていった。

伊達以前の過去の記憶、荒ぶる自然、土地の力、死者たちの魂が、越路山へ引き寄せられ、封じ込められ、そしてしだいに忘れ去られていった—「タブーの空間」越路山。

明治、封建制崩壊、仙台城撤廃。一民間人である八木久兵衛が越路山を購入する(八木山と改名)。彼は、まず真っ先に、山の最上部へ神社(越路山神社)を建立した。それは、伊達にかわって自然の力、死者の霊を抑え込み、仙台平野へ覇を知らしめようとしたというのではなく、山そのものを切り拓き、新たな時代の開発の端緒とするためであった。吊り橋をかけ、野球場を誘致し、各局テレビ塔が設置され、八木山団地が造成されていった。

しかし、地政学的にというのか、過去の因縁、記憶の継続とでもいうのか、、、テレビ塔は平野部全体へ電波を発信し、かつての仙台城の様に、新たな時代の象徴となり、現在の動物園や遊園地などの行楽施設は、本来の霊域としての越路山(八木山)を慰撫しようとするかのように振る舞い、沢山の市民を招き入れていく。一方、今なお八木山橋—竜ノ口溪谷は、深海時代以来の記憶を宿す地層を露出させ続け、死者を呼び込む。

もちろんそうした因縁を新しい八木山団地の住人達は知る由もない。本来特殊な山だった土地を切り崩して生み出されてきた新興の八木山団地は、ただ場違いな記憶喪失者のように、土地の表層に蜃気楼の様に浮かび続ける。

そんな折、突如、八木山動物園奥の山頂部に残されていた越路山神社(越路山神社)は、廃止され一私有地として柵に覆われ立入禁止となった。しかし誰一人としてそのことを省みる者はなかった。

2011年、東日本大震災。

またもやこの平野を大きな津波が襲い多くの物、人命が失われた。

海岸部から望む山(生出森や越路山)は、既にそれ以前から変わり果てており、もはや、神を祭り鎮めたり、死者の魂が寄り付く場所にはなりようがなかったはずだった。

しかし、この地震によって、八木山団地では無数の地割れや地崩れが発生した。

この沢山の大きな亀裂は、越路山の表層を覆う様にして生み出されていた八木山団地の性質を否応なく露見させることになった。地下に埋もれた土地の記憶—かつての「越路山」の記憶が地表に浮き上がり始める。

今ここで、彷徨える魂達との新たな交信が始まろうとしていた。

1 越路山神社の復元

「僕の町にあったシンデン—八木山越路山神社の復元から2000～2019」

子供の頃、八木山動物園の裏山が遊び場だった。その奥に越路山神社という神社があった。今から考えるとそこは八木山で唯一と言っていい神社だった。

それが1990年代の終わり頃、急に廃社されてしまった。

ある日、鳥居がバラバラに壊されて捨てられているのを見つけ驚いた。そして強い憤りを感じたのだった。捨てられていた鳥居の一片(丸太に赤く塗られたトタンを巻きつけたタイプの鳥居だった)を回収し、この鳥居を復元することにした。「7年前に破棄された八木山越路山神社・鳥居の復元 2000.6.12」というタイトルで東京の青山にあったギャラリーに展示したのだが、思っていたような反応は得られなかった。この鳥居作品は展覧会後に解体し、スタジオ奥に放棄した。

ところで、岩手県宮古市鉾ヶ崎の街には「おくまん様」という神社(熊野神社)がある。3.11の津波は鉾ヶ崎の街を襲い、このおくまん様の鳥居の地点で止まった。だから鳥居より高い場所のみが無事だった。現在、神社から見下ろす街の景色は、新たな復興の姿であり、新しくなったまばらな街並みである。このような街の劇的な変容を今まで何百年(?)も、この神社やこの場所に立つ者は、見守ってきていたのだなあと思った。人々が逃げ込む丘(森一盛り)であり、共同体の行く末を記憶し、人々の魂(死んでしまった人までも)を迎え入れる場所なのではないかと思った。

そうした場所は自分の住む仙台平野だと例えばどこだろうかと考え、海側から対面して見える、太白山、八木山、青葉山、大年寺山あたりの地帯ではないかとあらめて思った。

同時に八木山の最深部(最頂部)にあった「越路山神社」を思い出した。

太平洋が一望できるこの場所は、古来より特別な場所、おそらく仮の姿であったとしても「越路山神社」は破棄されるべきではなかったのではないかと感じた。

それで以前スタジオ奥に放棄していたこの越路山神社の鳥居の一片を、再び引っ張り出してきたのだった。そして今度は鳥居という一つのオブジェに完結するのではなく、神社そのもの、あるいは、神社という仮の姿を超えて、この霊域(シンデン—神殿)そのもののありうるべき姿を想起し、立ち上げていこうと考えた。この場所の特殊性、歴史の特異性に注視すると、ここで遊んでいた少年時代の奇妙な体験や記憶が次々と浮かび上がりがつなげていった。

そういえば、震災の翌日、八木山に避難していた自分は、確かに海岸部を見ていた(見続けることしかできなかった)。全てのライフラインが止まってなすすべもなく沈黙する八木山団地に対し、視界の彼方——沿岸部には幾筋もの煙が立ち上り、無数のサイレンやヘリコプターが空を駆け巡っていた。不思議な断絶——非現実感を感じた。

静まり返った八木山の街を子供と歩き、道端にインコが死んでいるのを見つけた。小鳥の死顔は無表情で生きているようにさえ見えた。「怒ってる」と、3歳になる子は言った。「変なことを言うなあ」とその時は思った。

しかし、自分には見えなかったのだが、あの日の晴れ渡った青空で、きっと無数の魂や想念、嘆き、怒りが渦巻いていたのではないだろうか？

逃げる場所を探し、寄り付く目安を失い、彷徨い錯綜する無数の魂で八木山の空はいっぱいだったのではないだろうか？

自分の街にあったら「シンデン」をつくりながら何度もそのさまを思い描いた。

2 八木山橋

東日本大震災直後の帰路、大渋滞で難儀した。信号は消え、車はほとんど動かず、どんどん暗くなり、ガソリンが無くなっていった。もともと山を切り開いて増設された新興住宅団地の八木山へ通じる道は限られていて、すでに主要な経路三つのうち二つがダメになったことをカーラジオで知る(残った一つは山をぐるっと迂回するため街の反対方面へ出なければならず、この大渋滞ではとても無理だった)。

とりわけ、「×××町が壊滅した」という沿岸部の衝撃的ニュースに交じって、「八木山橋が落ちた」という情報は奇妙なインパクトを残した。足元の地面が谷底へ崩れ落ちたような気分になった。

だが、最終的には最短ルートで進めるだけ進むしか手立てはなく、この八木山橋を目指さざるを得なかった。実際たどり着いてみるとズレただけで、警察が土囊^{どのおう}を積んで1台1台ゆっくり通していた。結局、この日なんとかこの橋を渡りきり溪谷を越え、通常10分のところを4時間ほどかけて八木山に戻ることができた。

とはいうものの、果たして本当に「戻れた」のだろうか？

この日を境に、自分は、現実ではないどこか別な世界に迷い込んでしまったのではないか？

もし震災がなければ、あのままそれなりに落ち着いた生活が続いていただろうと思うと今でも切なくなる。友人知人も昔のままで、途切れることなく、何かを目的として、愚痴りながらもそれなりに、生きがいを持って生きていただろう。しかしあの日、八木山橋を渡って以降、何かが変わってしまった。

震災後の世界が始まり、震災後の制作が始まり、震災後の人間関係が始まり、そして今に至っているのだ。

もともと青葉山と越路山は、間の深い溪谷で断絶しており、ここに最初の吊り橋がかけられたのは1930年代になってからだった。仙台市内(城下)側の「人界」から断絶されていた越路山は、この世から離れた「あの世」のような領域だったのかも知れない。間にはしる深い溪谷自体も海底時代の古い層が剥き出しになっており、まさに人界とは無縁の時空がパツクリ口を開けている状態なのだ。

もしかすると、3.11で一度橋が(落ちて)ズレたことにより、再びこの世から遮断され、いわゆる「地獄の釜の蓋」が開いてしまったのかもしれない。

すぐに修復されたとしても簡単に元には戻らない。

というか、これまでこの橋は何度も修復され続けてきているのだ。

橋の両脇の金網を破り溪谷へ飛び降りる者が後を絶たず、金網の修復跡を無数に点在重層させてきた。自分はこの異様な光景をいつも横目に見ながら育ってきたのであり、自分にとっての「修復」イメージはこの金網の修復跡につながっている。

この橋は、得体の知れない領域に取り囲まれた、実は危うい脆弱^{ぜいじやく}なもので、なんとか修復を重ねることにより、維持されてきていたと言えるのかもしれない。

八木山橋がつなぐ青葉山と越路山(八木山)の間は深い溪谷となっている。この谷は竜の口溪谷と呼ばれ太古の地層を露出させ海底時代の化石が採れる。子供のころはしばしばこの急な崖路を駆け下り溪谷を散策した(現在は封鎖されている)。

竜の口溪谷の中を進んでいくと八木山橋の真下へ出る。下から見た八木山橋は、青い空を横切る白線といったところで、あっけないほどシンプルだが、どこか遠くの世界の景色を見ている様な気分させられる。恐らく地底の底の住人には、同じようこの世があの世界に見えるのだろう。

八木山橋は昭和6年に八木久兵衛が八木山開発の端緒として、自費で吊り橋をかけたのがはじまりという。当初から見晴らしの良さと裏腹に落下の危険性が危惧されてきたらしいのだが、どういうわけか自ら下に飛び降りる者が

後を絶たず、戦前から戦後、、、そして現代の今日に至っている。

自殺防止のためか年々高く嚴重に改修されていく柵越しにみる谷間の景色は、青空の下に深い緑が広がり、塵界に染まらずどこかこの世ならぬものがある。なぜ柵の向こうへ行きたくなるのか？それは閉じ込められた牢屋の柵から見る自由な世界の様でもあり、こちらとあちらが入れ替わる様で不思議な気持ちにさせられる。そうしたことから八木山橋は昔からあの世とこの世の境にあったと言えるだろう。

八木山の住人は日々この橋を往復していて、みんなそれぞれ奇妙な体験をしてきている。

先日自分が車で通った時も妙なことがあった。

何か視界の一部に違和感があり、注視してみると、橋の中ほどの柵の根元に黒い靴とリックが置いてあるのに気づいた。人影は無い。「これはもしかすると、、、」と思ったが、そのまま通り過ぎてしまった。道行く沢山の自動車も、異常に気が付いたそぶりを示すものは無く、いつもの様に橋を通り過ぎていた。

帰宅後数時間して再び出かけることとなり、またこの橋に戻って来た時には、数台の消防車やパトカーで占領されて大騒ぎになっていた。

さきほどリックと靴が置いてあった場所の柵が取り外されてロープ？のようなものが下へ降ろされていた。柵が外された部分だけぽっかりと穴が開いて谷間の木々がむき出しに表れていた。まるであの世に空けられた窓の様でもあり、新鮮な空気が入ってくる様だった。柵の内側に私達がいて、この社会が営まれており、柵の外側には知らない世界がどこまでも広がっているのだ。

その出来事を経て、脱ぎ捨て置かれた靴やリックの記憶は、いつしか「脱衣婆」という民俗文化で育まれてきた古いイメージと結びついていった。

*「脱衣婆」とは 冥府の三途の川 のほとりに立っていて、亡者の衣類をはぎ取る 鬼婆で、「懸衣翁」がその衣を衣領樹に掛け、その枝の高低によって罪の軽重を定めるという存在である。

この世へ残したもののたち、痕跡が集積された欠片や記憶たちの権化のような存在をこの橋の付近に立たせてみたいと思った。衣服や靴や遺品はこの世へ捨てていくかりそめのものにすぎないのかもしれないが、この世へ残していく念や思いのひとつの象徴であり、その人が確かにこの世に存在したことの証でもある。

この世の約束事、装い、衣服や知識や言葉は捨てて、「柵」という囲いの外へ、別な世界へ向かう。

この場所・「橋の渡し場」の権化。

拾った服や布切れ、靴を集めて組み込んだ。体は書籍でできている。この世の約束事、装い、衣服や知識や人の世の言葉や意味は捨てて、別な世界へ向かう。

4 死体の印

「薬局の主人の死体」

昆虫採集に熱中していた子供のころ、よく夜中に八木山動物園の裏山に出かけた。懐中電灯を片手に真っ暗闇の裏山に入ると、昼間見ていた景色が一変した。見かけない虫たちや不気味な暗闇、何者かの気配に満ちていた。

ある日その裏山の入り口付近で、路上に書かれた白線を目にした。暗闇に照らし出された白線は人の形を描いていた。帰宅後、近所の薬局の主人がそこで殺されていたということを知った。平和な新興住宅地の端っこで起こった

珍しい殺人事件の現場だった。あそこで何があったのか？何者がそこにいたのか？わかっているのはあの場所・白線の跡に確かに人間が斃れていたということだけである。その後、この殺人事件の顛末、犯人がどうなったかは覚えていない。

5 政宗騎馬像

現在青葉城址には伊達政宗騎馬像が設置されており仙台の街を望む一つのシンボルとなっている。青葉城址があった青葉山の隣にある八木山(越路山)は、長い間、青葉山の後背地とされてきた。しかし視点を変え、八木山(越路山)の方をむしろ中心に考えた時、前面に位置するこの青葉山の政宗騎馬像は、八木山(越路山)を守る「狛犬」の様なポジションになってくる。いわゆる仙台の街をつくったと言われる「主人」(伊達政宗)が「門番」に置き換わるのだ。

6 ヘビ取りのおじさん

子供の時、虫取りをしていて普段とは違ったエリアに迷い込んだことがあった(現在の八木山動物園地下鉄駅を下った日赤病院近辺)。崩れかけた小屋があり、絡み合った繁みに覆われ、見たこともない巨大なショリョウバッタやトノサマバッタが乱舞する不思議な場所だった。虫取りに夢中になっていると、知らないうちに一人の男が後ろに立っていた。全体的に白っぽい服で薄汚い恰好のおじさんだ。ヘビ捕りをしていると言う。大きな汚れた白い袋を持っていた。おそらく、その袋の中では、何匹何十四何百匹？という、この土地の奥底で太古から生きながらえてきたはずのヘビたちが詰って絡まりうごめいていたに違いない。

その後八木山団地の開発は進み、いつのまにか古い小屋などは消え去り、巨大な日赤病院が立ち柵が張り巡らされた。ヘビ捕りのおじさんをその後目にすることはなかった。

7 開拓小屋

自分が物心ついた時分の昭和40年代。八木山団地はどこもかしこも新しく、コンクリートの生乾きの匂いが漂い、やたらと空き地が多かった。新興住宅地用に整備されたエリアの周辺部に、いくつかのボロボロの小屋が残されていたのをしばしば目にしていた。八木山団地が開発される以前、山には小規模ながら様々な人々が入り込み様々な生業をおこなっていて、そのまま住み続けて生活している人もいたようである。

つくられた人工的な楽園としての八木山団地の中にさらにつくられた動物園という楽園の中のサル山。その裏側に対照的に残された舞台裏—開拓者たちの小屋の廃墟。

8 越路山神社鳥居

正面左側の部分のみかつてあった越路山神社鳥居の実際の部材である。破棄されていたこの部材から、この鳥居—この神社(シンデン)全体の「復元」の発端となっている—参照「20・越路山神社(越路山神社)をめぐる記録」。

9 動物園から逃げる動物たち

神社外側、内側の様々な動物たちの像、14「檻の中の生きものたち」、16「サル山」、43「動物園から逃げたチンパンジー写真」、45「小学生時の写生大会の作品」。

八木山(越路山)には大きな動物園がある。

自分はこの動物園の目と鼻の先で生まれ育った。

物心ついた時から、朝起きるとアフリカのサバンナやアジアのジャングルに生息しているはずの動物たちの鳴き声が大合唱になって聞こえてきた(風向きによっては匂いも)。遊び場であり遠足の間であり写生大会の間でもあった。特にこの動物園の裏山に足しげく通った。この裏山は八木山のもっとも高度の高い、奥まったエリアでもあり、越路山神社があったところでもある。

子供のころの記憶ではたまにこの動物園から動物が逃げることもあった。そのため何となくだが言い知れぬ緊張感もあった。

小学校低学年時のある日のこと。友達と動物園の裏山に虫取りに出かけたのだが、遠くの繁みの前にチーターを見つけてしまった。我々は足を止め、身を隠し伏せた。そうして自分の目を疑った。信じられないことだが何回見てもやはりそこにチーターがいる。「チーターは動物の中で一番足が速いから見つかったら絶対逃げられない」と戦慄した。我々は静かに方向転換し這うようにして逃げた。翌日も友人たちと裏山の同じところに出かけて行ったがやはり同じ場所にチーターがいた。怖くてそこから先の山の奥に行けない。またあきらめて家に帰った。

さらに翌日一人でこっそり出かけてみた。やはり同じ場所にチーターがいた。草陰に隠れながら今度は少し落ち着いて観察した。ここにチーターに居られると大好きな裏山の奥に入れない。なんとかしなくてはならないのだ。しかし、なんでもいつも同じ場所にいるのだろうか？しかも全然動かないのはおかしい、、、。

少しずつ前進しチーターとの距離を詰めていった。疑念は確信に変わり始め、好奇心が恐怖心に勝った。草陰から飛び出しチーターに向かって突進。思いっきり横っ腹を蹴飛ばした。「ガタリ」といって倒れた。足元には古びたソファーが転がっていた。

廃棄され色あせてヒョウ柄がリアルなチーターの模様のように見えたのだった。「やっぱりな」という安心したような、どこかがっかりしたような気持になった。「何しろ今ここは現代(昭和49年)の日本なのだから」、とは小学生の自分は言わないがだいたいそのような気持ちをその時抱いたのだった。

自分の幼年期の記憶の中において、確かに、八木山の山と動物園はつながっていた。時に動物たちは逃げ出し繁みに隠れ生息し森に混ざりあっていた。

この山の神社—シンデンを想起するにあたり、動物園の野獣たち、逃げ出した動物、檻の中の動物たちも一緒に形象化してみたいと思った。

その動物たちは、災害(神の天罰)を避けるため世界中からこの山に集められたノアの箱舟の動物たちの様でもあり、この土地が開発されるはるか以前の太古の動物たちともつながっているのだ。

そうして、そもそも、「神社(シンデン)」とは、これら太古の生態系と相殺で生み出されるものなのかもしれないと感じる。

近代になってこの山を開発する最初の端緒として神社(越路山神社)が設置されたのであり、それはいわば神話的起源さながら、自然の秩序から近代の人間(ここでは「捏造」された新興住宅地ゆえの二重の屈折として「近代的」とあえて付す)の秩序への転回点として、越路山神社が新設されたのであった。それゆえ、自然の力を象徴するオドガ森の巨人の前に、あるいは対峙—制御するように、この神社は配置されている。

10 ベニーランド・オープン時キャラクターたち

「ベニーランド開園時キャラクターたち」(昭和43年)(神社内筆筒引き出し内)

八木山の所有者兼開発者の八木久兵衛の子孫は現在、遊園地である八木山ベニーランドの経営者となっている。自分がちょうど物心ついたころこの遊園地を象徴するキャラクターとして記憶に刻まれた顔を引き出しの中に配置した。異国情緒を過度に演出したイメージとなっていて歯をむき出しにして笑っている(ターバンを巻き、頬に原色でペインティングしている)?自分にとってはちょっと不気味な存在であった。

11 45年前に動物園のトイレで会った少女像

小学生の時、動物園で遊び、夕方そのトイレで出会った少女のイメージを再現した。

見てはいけないものを見てしまった。突然。近距離で。密室で。美しい夕日が差し込む中、戦慄が走り心の中で絶叫した。(※その時の少女に関し、詳細をここで触れることは差し控えることとする)。

(※一種の「奇形」なのだろう、、、特殊鏡でデフォルメされた様な驚くべき容貌であった)

12 ネコの死体

13 消え去る前の像・魂(青い人々／天使たち)

新興団地のはずれにある裏山は、奥に行けば深山が続くが、入り口付近は吹き溜まりといった感があり、雑草の中に現在でいうところの不法廃棄物やわけのわからないものが破棄・放置されていた。様々な雑誌、印刷物の写真類は野外に放置されることによりインクが飛び、どれもこれも青白く変色し、映し出された表象は消え去り、やがては何もかも土くれに帰っていく。

青い色に変色した写真に映し出される人々は、さながらこの世とあの世の間にいる天使のようでもある。社会のはずれの境界に迷い込んできた様々なモノたち(破棄されたゴミ、雑誌、青白くなった写真、死んだ猫など)で、神社内の吹き溜まりを再構成してみる。

14 檻の中の動物たち

宮城県沿岸の浜辺などで拾ってきた様々なキャラクターのぬいぐるみ達によって、八木山動物園内の檻の中の動物たちを暗示しようとしている。様々な文脈から寄せ集められた「生きもの」たちであり、人の手で飼いならされて、可愛がられ、時に破棄され、忘れ去られる運命にあり、外側の逃げた動物たちと対比されている。

15 山奥の朝鮮学校

八木山動物園の裏山の奥には、この地区の開発事業の端緒となった越路山神社がある。この神社の奥の小道をさらに進んだ奥には朝鮮学校があった。その先はほとんど行き止まりで何もないので通常学校関係者以外は神社より奥には行かない。子供のころ何も知らないで神社の奥をうろつき、少しずつその学校の存在を知るようになった。誰もいないはずの山の奥で、繁みの奥から突然現れた同年代の子たちにはとても驚かされた。ここでは自分が「よそ者」になった様だった。食べかけの菓子パンをもらったり、運動会に偶然参入したりしたことを思い出す。どう見ても自分と変わらない人々なのに、運動場に響き渡るアナウンスや彼らのしゃべっている言葉が全く聞き覚え無く、世界がどうにかなってしまったのか、パラレルワールドに迷い込んでしまったのか？その頃の自分には全く状況が理解できず、衝撃を受けたのだった。自分たちが暮らす街の山の奥の奥に、自分のいる世界とそっくりだが全く違う世界があるということの不思議。その意味や理由に関して何も知らされないで育ってきた自分。*（東北朝鮮朝鮮初中級学校は仙台市太白区八木山に1965年開校し、2009年高級部のみ休校。）

16 サル山

八木山動物園の中には大きなサル山があり、子供の時からよく通ってきた。大学の際は「サル学」のゼミ（伊沢紘正）で観察し、レポートを書いた。

ある意味で、疑似的に作り出された楽園としてのニュータウン（八木山）の中のもう一つの疑似的な世界でもある。サル山のサルたちと八木山の私たち。八木山にサル山があるのか八木山がサル山なのか、、、。

17 太古の海底の生きる生物(クジラ)

32 「ヒト、ウミガメの骸骨」参照

18 千代と仙台(千躰仏と仙人とTVタワー)

「千躰仏と仙台」(山水画の掛け軸、茶道具、人物写真切り抜き、震災翌日の新聞)

海と山、死者と生者のかかわりを示していただろう「千躰仏」—「千体」という地名を、教養的仙人思想とも呼べそうな個人的趣向で仙人が住む場所として「仙台」と書き換えてしまった伊達政宗(一説には天下人になれなかったため現実を超越する仙人を志向したとも言われている)。それは、それ以前の土地の歴史や人々の魂を封じ込め乖離したものだっただけだ。

この土地で生きてきた人々の世界と政宗の志向する世界。二つの「せんだい」。二つのまったく異なる世界を重ね合わせてみた。

「追廻・大橋から見た青葉山・八木山の夜景」

夜、仙台城下(追廻・大橋付近)から山側を見ると、山頂に二つのオブジェがライトアップされ並んでいる。伊達政宗騎馬像(青葉山側)と東北放送テレビ塔(八木山側)である。この平野(仙台平野—この世界)を支配する新旧の二つのシンボルが仲良く並んで暗闇に浮かび上がる。この奇妙な景色に気が付く人は少ない。さらには、この二つの侵入者が、この山の意味、土地の意味をすっかり書き換えてしまったこと。封印してしまっていることを認識する者はほとんどいない。

19 野球と戦争(八木山球場をめぐる)

戦前、八木山には現在の八木山動物園が作られる以前、野球場が設営されていた。この「八木山球場」では昭和9年日米野球対戦第4戦が行われ(日本各地で全16戦)、ベーブルースが2発の本塁打を放った(それを記念して近年ホームラン球の着地した地点にベーブルースの銅像が設置されている)。

この日米野球対戦の行われた10年後に太平洋戦争(日米対戦)がはじまり、仙台空襲では仙台の城下町が灰燼に帰し(父の家も空襲で焼け青野家は一家離散となる)、広島と長崎に2発の核爆弾が投下され終戦となった。

自分が小学校1年生時に描いた野球をしている絵と仙台空襲後当時の写真を重ね合わせながら、野球と戦争と仙台と自分の因果な関係を一つの小さな空間に再構成した。

「いずれはプロ野球選手になるのかなあ」と脳天気になっていた小学校1年生の自分。なぜ「野球」だったのか？そしてなぜ八木山に野球場が作られたのか(そしてその後、動物園がつくられたのか)？なぜここにベーブルースが来たのか？そしてなぜ日米野球対戦がこの時期挙行されなければならなかったのか？

*日米野球対戦は悪化する日米関係を緩和する目的もあり1934年に行われた。

第10戦静岡県草薙球場では沢村英二投手がアメリカ打線を1点に抑えたのは伝説化されている。

日本プロ野球がここから組織化されていったといわれている。

1925年(大正14年)越路山神社建立

1929年(昭和4年)越路山あらため八木山に野球場新設

1930年(昭和5年)八木山公園開園

1934年(昭和9年)日米親善野球大戦でベーブルースが来日初となる2本のホームラン。

(全16戦のうち第4戦が仙台・八木山で開催。現在ベーブルースのホームラン着地点に銅像が建立されている。静岡での第10戦では沢村栄治投手の伝説的活躍。これを機に日本プロ野球が組織されていった。)

1940年(昭和15年)日米開戦。行楽地としての八木山一帯は荒廃。

1945年(昭和20年)7月仙台空襲で仙台市中心部壊滅。

8月広島、長崎に2発の核爆弾投下。終戦。

20 越路山神社(越路山神社)をめぐる記録

「神社中央内部(越路山神社鳥居写真、解体後写真、越路山神社跡地看板、鳥居欠片、人型など)」、「神社後背部(八木

山、越路山神社歴史の各写真、資料など、鳥居作品2001年画像個展案内状)」、「巨人像(最奥後背部)」

越路山神社は、この山を伊達家から買収した八木久兵衛の部下であった金子隼人により、近代になってこの山を開発する最初の端緒として、開発工事の無事を祈り設置されたのが始まりとされる(仙台で最も古いとされる多賀神社から分祠された。多賀神社は沿岸部から八木山への登り口にある。祭神は山の神、水の神、火の神)。いわば神話の起源さながら、自然の秩序から近代の人間の秩序への転回点としての越路山神社が新設されたと解釈できる。それゆえ、自然の力を象徴するオドガ森(太白山)の巨人の前に、あるいは対峙—制御するように配置されている。

この越路山神社は平成のはじめのころに突如破棄された。もともと山奥に設置され足を運ぶものもまれだったためにほとんど話題にされることはなかった。

子供のころからよく遊びに来ていた自分は、90年代の終わりのころ久しぶりに訪れ、神社廃止後に解体され破棄された鳥居を目にし大変驚かされた。柵で囲まれ私有地(八木久兵衛の子孫—「紅久」所有)として立ち入り禁止にされた状態になっていた。基本的には現在もそのままである。

破棄された草むらに投げ出されていた鳥居欠片、神社跡地の看板などを收拾し、その復元を試みた。2001年に東京青山の「アートスペース」個展にて展示した。

その時使用した鳥居の欠片を、2011年の東日本大震災を経た後、ふたたび用いながら、鳥居のみではなく、神社(社殿や神域)全体を、自分の記憶を越えて、ありうべき姿に再構成していくところみとなっている。海と陸をめぐるこの土地の歴史・災害や失われたモノたち・死者との交わり、現在の街の姿、様々な問題を抱え込みながら、物理的にも心理的にも拡張された復元作業を推し進めていった。

21 30年前の越路山神社鳥居の写真

22 この土地にねむる全ての者の魂

23 越路山神社跡地からの景色

この神社跡地からは太平洋・仙台沿岸部が一望できる。この場所から見えるはずの仙台市荒浜、名取市閑上といった街は、東日本大震災の津波により壊滅的ダメージを受け景観を一変させてしまった。

24 破棄された越路山神社の鳥居の一部

25 忘れ去られたものたちの部屋

越路山神社を再構築するにあたり宮城県地域の方々から中古家具の提供を受けた。
いただいた家具の引き出しの中には、その家々の「匂い」とともに様々なモノが残されていた。
例えば下敷きにした広告や新聞類、ハガキや領収書、メモや防腐剤etc。

それぞれの家で長く使われた家具の中に残された人々のわずかな痕跡。それらを集めてこの小部屋に再構成した。すでに失われた過去の時空に彷徨うモノたちのための部屋。やがては誰からも顧みられなくなり、記憶から、世の中から、結局は消えていくこの世界の全てのものたちへのオマージュ。

26 瓦礫の温泉

火山の多い日本列島はそれゆえに温泉も多い。
海に囲まれ海洋資源に恵まれているが津波もある。
列島の豊かさと危険は常に隣り合わせで表裏一体だ。
その表裏一体の中にこそ風土のエッセンスがあり文化の核がある。
温泉と地震・津波はつながっている。
瓦礫の沈む温泉で湯治する部屋。

27 島崎藤村の歌碑(下一荒浜の瓦礫とインコ)

「島崎藤村歌碑」、「荒浜の瓦礫、死んだインコ写真(下段引き出し内)」

島崎藤村は明治29年、わが母校である東北学院高校で約9ヵ月だけ教鞭をとった。
その期間、近代詩の草分けとなる「若菜集」の主要な歌を作ったと言われる。住居近くであった荒浜の海の音を聞きながら詠んだという。その中の「草枕」の一節は、歌碑に刻まれ、宮城野・荒浜・太平洋を一望できる八木山一動物園の裏山に設置されていた(現在では藤村が住んでいた旅館跡地に移設されている)。
東日本大震災の瓦礫(自分が住んでいた八木山の建物の一部)を歌碑に見立てながら、この詩の一節を記し配置した。古代以来の「草枕」を越えんとした近代精神が現代に宮城野で津波と出会う。

28 荒浜海岸部から見える八木山・太白山風景写真

仙台沿岸部(荒浜周辺)から内陸部(仙台中心部)を見ると、太白山、八木山、青葉山、大年寺山などがまず見える。間の空間には高いものが何もない(平らな土地で現在は多くが水田となっている)。3,11の津波の時は、この平らな平野部を津波が襲い、仙台中心部に迫ったが幸い東部道路でせき止められた。東部道路の土手にはせき止められたおびただしい瓦礫が折り重なっていた。3,11当日、自分はこの沿岸部へフィールドワーク(漂流物等の収拾)に出る予定であったが、直前に地震があり寸でのところで留まった。もし沿岸部へいつものように出ていたらかなりの確率で死んでいただろう。津波を察知した後で逃げて、この地帯では逃げる場所が無く、きつと遠方の小山(太白山や

八木山)を望みながら土砂に埋まって死んでいただろうことを思う(震災後、この付近の津波時の航空映像において逃げ惑う自動車達を見るにつけキリキリ胸がと痛む)。いろいろな意味で海と山はつながっているのだと震災後に思うようになった。

29 死んだ金魚

ある日、いつも虫取りに行く動物園の裏山で、木にぶら下がっている赤い水が入った奇妙なビニール袋を見つけた。よく見ると中で金魚が死んでいた。金魚の体の色が溶けて水が赤くなっていた。水と金魚がビニール袋の中で一つに溶け合っている様だった。金魚の体は薄まって少しだけ脱色していたように思えた。夏祭りか何かの金魚すくいで捕った金魚をそのまま木にぶら下げて放置したのだろう。なぜかその時の光景がいまだに忘れられない。

30 赤い帽子の男

赤は血、生命の象徴であり、「紅花」関係の商売をルーツとしてきたという八木久兵衛の「紅久」の紅、そして現在その子孫が経営する遊園地「ベニーランド」の「紅」であり、仙台に本拠を持つプロ野球チームの「楽天」の色でもある。赤い楽天の帽子から赤い人物を神社鳥居の裏に描き出した。*(ちょうど近年亡くなった楽天の監督だった「燃える男」星野仙一追悼の意味もある)。

31 怪獣人形

「昭和40年代の怪獣人形、近年自分の息子(2~3歳)が粘土で作成した円谷怪獣たち」

動物園とともに育った自分は、物心ついた時から動物・昆虫好きになっていた。当時子供のTV・映画で興隆期にあった「怪獣」への趣向もその延長線上にあった。

異国の珍しい動物たちとテレビの怪獣たちの境界はあいまいだった。

もちろん怪獣たちがテレビの中のフィクショナルなものであることは、頭のどこかでは理解していた。

しかし圧倒的な夕闇迫る山際や怪しげな雲行きの空を見ていると、何者かがこの世界のどこかに潜んでいるという気配を感じ、いつかかならず怪獣が「いま・ここに」現れ出てるに違いないと感じていたのも事実である。

幼少期に実際に遊んだ怪獣人形たちと今幼少期にある息子の作成した怪獣たちを、動物園の動物たちの裏面の柵に設置する。それぞれ混じり合いながら当時のリアルな想像空間を再現する。

32 ヒト・ウミガメの骸骨

「骨・人間の骸骨、ウミガメの骸骨(白いヘルメット、荒浜で拾ったウミガメの頭蓋骨の一部より)」

海辺で収拾した白いヘルメットは、荒波に磨かれま摩耗し質感が骨のようになっていた。これをかぶっていた人の頭

蓋骨のイメージと結びつき全身を表した。支持体になっている筆筒は立ち上がった棺桶のような存在ともなる。そのそばにあるウミガメは、やはり荒浜の浜辺で収拾したウミガメの頭骨の一部を埋め込んで再現したものである。震災の少し前から異常気象が続き海温が上昇したためか、浜辺でウミガメの死体をよく目にするようになっていた。かつて仙台平野も海岸線は現在よりもっと内陸まで入り込んでいたとされ、八木山と青葉山の間に走る竜の口溪谷の地層からは沢山の海にちなむ化石が発掘される。昔から海と山は交わり深くかかわり合っていたのだ。

33 山の奥で見つけた卵

ある日、動物園裏山の奥の大きな木の根もとから、一個の白い球体を見つけ出したことがあった。喜んで家に持ち帰った。何かの卵の様だが何なのだろう？
この中から何が生まれてくるのだろうか？いつ生まれてくるのだろうか？
その完全なる球体は、しかし、いくら観察しても何の気配も無く沈黙したままだった。
様々な想念が頭をめぐり、少しづつ不安になってくる。いったい生まれてくるものは鳥か？蛇か？あるいは何かよくわからない未知の生きものか？もしもひな鳥が孵ったらどうやって育てればよいのだろうか？あるいはママシカ何かだったら家に置いておくのは危険だ。次第に恐ろしくなってきた、厄介な重荷を背負いこんでしまった様な嫌な気分が変わっていった。自分は軽はずみにも森の中から大変なものを持ってきてしまったのではないか？
さらには、もしかしたらこれは卵ではないのではないか？ただの丸い石ではないのか？ピクリとも動かないし温かみもないし模様も何もないしとても固い。徐々にその冷たい完全な白色の球体が「鉱物」か何かのようにも感じられてくる。
あるいはこれはただの卵の「偽物」ではないのか？卵を装った模型か玩具の類なのではないか？と疑い始めてしまった。
思い悩んだ挙句、その丸い物体を、家の裏のマンホール蓋の上に叩きつけてみた。
「グシャリ」と砕け散り地面に黄色い液体があふれ出た。
一瞬の出来事だった。
「なんだ本物だったのか！」と後悔したが、もはや取り返しがつくわけではなく、衝動的行為に自己嫌悪と罪悪感を感じた。何となく無かったこととして誰にも、母にすら語らず、心の内に封印してしまった。ただただあの飛び散った黄色い色が新鮮で目に(心に)突き刺さった。あの黄色は本物の命そのものだったのだ。

34 子供のころの自分の部屋(窓から太平洋が見える)

ちょうど昭和30-40年代的な子供時代に家にあったような大ぶりの筆筒が手に入り、その内側をそのまま当時の自分の部屋に見立てて再構成した。

自分の愛読本であったところの「学研ひみつシリーズ」や当時実際に描いた近所の絵を配置した。窓からは太平洋・荒浜や閑上が見えた。

35 八木山小学校校歌

自分が通った八木山小学校の校歌は、1番が「日が昇る太平洋に」、2番は「雲が行く太白山に」ではじまる。震災を経て今思うに、まさに海と山が呼応する八木山の場所の特質をシンプルに歌っていたことに気付かされた。海なのに「『タイヘイヨー』って変な名前だな」という当時の印象を思い出す。

36 八木山本町一丁目8-13青野家での昭和45年12月24日クリスマスイブの夜

「八木山団地の航空写真に空けられたのぞき穴(昭和45年のクリスマスイブ風景)」

この部分は自分が生まれ育った家の実際のベニヤ壁を流用している(子供のころはこの木目模様が顔に見えて怖かった)。八木山団地の航空写真が貼られ、ちょうど当時の自分の自宅の位置に穴があげられており、中が覗けるようになっている。中の小部屋は「昭和45年12月24日青野家のクリスマスイブの夜の風景」として設定されている。5歳離れている兄とまだ2歳の自分がクリスマスケーキを前にしている。昭和の日本の普通の核家族のクリスマスイブである。新興住宅団地の各家々で、おそらく同じ晩に同じような光景が無数に繰り広げられていただろうことを思う。

37 昭和63年元日・初日の出

昭和63年元日、友人と初日の出を見に行った時の記念写真。八木山から太平洋を望む。
まさかこの海に津波が来るとはこの時には夢にも思わなかった。

38 八木山の家

「宙に浮かんだ自宅」(タナの中)

八木山団地が形成され始める昭和30-40年代は、みんな似たような外観の簡易なプレハブ式一戸建て住宅が広がっていて(現在の住宅群も似ているが)、屋根は青か赤のトタン屋根と決まっていた。自分の家も自分が生まれた年である昭和43年に建てられた。屋根の色は赤だった。自家用車も当時ようやく庶民も手にできるようになった。我が家の車は「ファミリア」だった。

一軒家に自家用車、子供3人兄弟5人の核家族。サラリーマンの父と専業主婦の母。新興住宅地。戦後世代の典型的な家庭。

39 八木山・大年寺山のテレビ塔

「ライトアップされたテレビ塔の夜景写真(タナの中)」、「テレビ塔の絵」、「正面鳥居上最上部のパイロン」。

仙台市中心部の小山である八木山周辺(八木山、大年寺山)には現在テレビ塔が4本立っている。(八木山に東北放送、隣の大年寺山にミヤギテレビ、仙台放送、NHK・東日本放送・東北放送共同)。仙台平野を見下ろすこの場所には、地政学的にというか象徴的にというか、かつて「仙台」の名前の由来となった千体仏が置かれたり、奥州仙台藩の中心となる仙台北城が築かれたりした。現在、夜になると色とりどりにライトアップされさながら山の上の仏塔の様に怪しく輝く。山の下から見れば見ものかもしれないが、山の上の団地に住む者にとっては、夜空を恣意的な原色で支配されているようであまり好きではなかった。

自分は、子供のころからこれらテレビ塔を「東京タワー」と重ね合わせながら育ってきた。パリのエッフェル塔から東京タワーをへて東北放送テレビ塔に至るその関係は、そのまま中央の縮小版イミテーションとしての地方都市・仙台の位置をわかりやすく表していた。通っていた近所の絵画教室で何度もこのテレビ塔の絵を描いた。シャガールやドローネの描いたエッフェル塔をその時はまだ知らなかったし、東京タワーすら本物を見たことがなかった。何も考えずにひたすら無心にこの赤いテレビ塔を描いた。自分の街のてっぺんにはこのテレビタワーがあり、その下に自分たちが暮らしていて、当然の様にそれを描いた。この「赤い塔」になにがしかの一体感を感じていたのだと思う。

40 虫取り作文(小学一年生時)、昭和50年代八木山昆虫分布図、虫取り三人組写真

「昭和50年代八木山昆虫分布地図」、「虫取り三人組写真」、「虫取りの作文」。

大正13年、越路山を伊達家の家臣たちから買収した実業家5代目八木久兵衛は、この山に「八木山」と自身の名前を命名し様々な開発をはじめていく。八木久兵衛の下で現場監督となって中心的な役割を果たすことになる金子隼人なる人物は、今後の開発事業を安全・円滑に進めるためとして、山の頂上部に「越路山神社」を開設した(何故わざわざそうした手間を取ったのか今となってははっきりしないのだが、何かそうせざるを得ない事情があったようだ)。伊達家の狩猟場、青葉城の後背地として、何百年の間、立ち入り禁止区域となっていた山の本格的開発はまさにこの神社設立から始まった。

この開発事業を現場で取り仕切った金子隼人の子孫は、その後もこの山(八木山)の頂上部(動物園前)に住み続けた(現在まで廃墟化して残っている「金子商店」はその証だ)。どういう因果かはわからないが、その末裔と自分は幼友達であった(おそらく金子隼人のひ孫世代にあたるだろう)。彼は小学生になったの私の最初の友達となった。家が近いので最初の登校日以来一緒に学校へ通った。

彼と一緒に生まれてはじめて「虫取り」をした時のことを今でも覚えている。近所の空き地(今思えばその一帯はだいたい彼一族の所有地だったはずだ)に沢山の未知の生きものがあることにはじめて驚かされたのだった。その時はじめて「オンブバッタ」という奇妙な生き物を捕まえた。このバッタの顔は、その時の自分にとって、どう考えても規格外で神秘そのものだった。彼もこのオンブバッタを激しく欲し、ついには泣き出すほどだったので、自分が捕まえたのを譲ってあげた。その後自分は「虫取り」に夢中になっていった。団地開発整備が広がる昭和40年代の八木山において、裏山や空き地に残された繁みや虫たちの存在は、最後の自然そのものだったのだと今あらためて実感できる。

1978年、宮城県沖地震に遭遇したのも、金子商店裏の彼の家の玄関先だった。玄関に置かれた水槽が激しく揺れ水があふれ出し、彼の母が絶叫し、隣の家屋根が見る見るうちに崩れていったのを昨日の様に思い出す。

41 太白山(おどが森)

「小学4年生当時に描いた太白山の絵」、「太白山写真」、「オドガ森伝説」。47,48,49「神社後背部の巨人、アイヌ乙女、白蛇」など。

仙台中心部には大きさは小さいがピラミット型の特徴的な山がある。

伊達政宗が仙台平野にやってきて「太白山」と改名する前は、「オドガ森」と呼ばれていた。

現在でもここの神社は「生出が森神社」という名で、この付近は「生出(おいで)」という。この名前の由来の一つにはアイヌ語説がある。この地域にもかつてはアイヌ人が、あるいは蝦夷(エミシ)が住んでいたはずだ(この地域には縄文時代の集落が集中している)。

この「オドガ森」には巨人伝説がある(白い大蛇伝説もある)。

太白山・巨人伝説

おどが森(太白山)の頂上は、ごろごろした岩石で、むかし大男が腰かけたという大きな一枚岩がある。大男は、この大岩に腰をおろし、右足を名取市高館の吉田の田んぼに入れ、手を太平洋にのぼして、魚や貝をとって食べていた。大男は、ときどき村に出てきて、お百姓さんのしごとを助け、秋の忙しい稲あげのときなどは、何百人分もの稲束をはこんでくれたという。

海との関係、平野との関係が語られており、事実、海岸部からこの小山は目立ち、漁労関係者からは目印的な存在となってきた。

海岸部から仙台中心部を眺めるとこの太白山(オドガ森)と八木山(越路山)、青葉山(千躰仏)が並んで見え、視線を受け止めてくれる。もしかすると東日本大震災でも(あるいは政宗の時代の慶長奥州地震や、平安時代の貞観地震でも)津波から逃げる人々の視線の彼方にはこれらの山があったのかもしれない。「太白山」という伊達政宗が命名したらしい現在の呼び名は、このような土地の関係性、歴史性を封殺してしまっている。

42 八木山・青葉山・卒業制作

「青葉山の絵、青葉山での大学卒業制作、青葉山公園化伐採画像など」

八木山、青葉山をめぐる思い出の文物。八木山で生まれ育った自分は大学に進んだのだが、八木山(小中学校)から隣の青葉山(大学)に場所が移っただけのことだったかもしれない。この二つの山は龍ノ口溪谷で別れてはいるが朝鮮学校の奥でつながっていて一体の森を形成していた。大学の卒業制作ではこの森をテーマに制作活動を進めていった。生まれてから幼年期、大学の制作(青葉山の森をテーマにしての制作活動だったが、森の木の伐採・公園化が開始され軌道修正を余儀なくされた。ちなみにこの森の木の伐採への怒りは、その後の「再生」というテーマの一つのきっかけとなった。)、現在まで同じこの場所ですごしてきた個人的記録。

43 動物園から逃げたチンパンジー写真

44 3,11のひび割れ写真(自宅)

「仙台市太白区八木山・弟宅(現自宅)玄関前ひび割れ(3,11翌日撮影)」

震災翌日、子守りをかねて近所を歩いた。

昨日とは違って変わり寒いがよく晴れわたった青空(実際にはこの時まだまだ地獄さながら生死をさまよっていた多くの人々、親戚や友人知人たちがいたわけだが)。新興住宅地内の道は各所で大きくひび割れ段差ができ塀が崩れていた。しかし家そのものが崩壊しているところはほとんど見当たらず、ちょうど子供の時に体験した宮城県沖地震(1978年)の記憶とダブった。

久しぶりに道の先にある弟の家の方にまわってみることにした。その一帯では道の亀裂がより激しくなっており、場所によっては大きな陥没ができてアスファルトの下に大きな穴を覗かせていた。それはまるで地底に広がる闇の世界への入り口の様であった。弟の家は変わりのないようには見えなかったが、道路から家の土台中央下部に亀裂が走っているのが気になった。「大丈夫でよかったね」とあいさつを交わし、とりあえず安堵して帰宅した(数年後、まさかこの弟の家に自分が住むことになろうとは全く予期していなかった)。

その後繰り返される激しい余震のため、八木山団地内のひび割れや歪みはさらに大きくなり、弟の家もかなり傾いて、ついには住めなくなってしまった。八木山界限では結局かなりの数の家々がダメになってしまった(*現在では建て替えられたり空き地になったりしている)。

戦後の団地開発時、土手に盛り土したところから崩れ、その部分に建てられた家々は今回多くが傾いてしまった。あたり一帯にできた大きな亀裂からは、それ以前の「世界」がパツクリと顔を出していた。

ひどい余震は続き、何度も何度も、、、これでもかと嫌になるほど地表を揺らし続けた。

ものすごい力—知らない何者かがこの下に、亀裂の奥の闇の中に「いる」—という恐怖と実感が湧いた。自分たちは東の間この地表にへばりついて暮らしていたのだと悟る。

しばらくすると、亀裂や穴はまさにその場しのぎという感じで、塞がれたり盛り土されたりして、何事もなかったかの様に震災後の世界が動き出した。

しかしおびただしい修復跡は、凄まじい未知の力、地下世界の気配を刻印し続けていた。その気配は古い過去の時間や死者たち、失われてしまったあらゆるものたちと繋がっていた。今自分が立っているこの土地は、もはや元の同じ世界ではない。修復跡や歪みや気配を抱えた、以前の世界と似て非なるものなのだ。

突如我々は別な新しい世界に投げ出されてしまったのではないか。

もはや上澄みの装いは消え、法律や制度や慣習も消え去り、分断と物質と魂、、、裸の世界が露出する。

* (弟の家は震災後数年、傾いたまま放置されていた状態だったが、「ジャッキアップ方式」という工法で修復工事を施し、新たに自分とその家族がその家に移り住むことになり現在に至っている)。

45 小学生時代の八木山動物園写生大会の絵

八木山小学校では毎年動物園で写生会をしてきている。自分もこの写生会で毎年異なる動物を描いてきており、学年ごとの推移を見比べることもできる。

46 越路山にねむる祖先

古い筆筒を一種の棺に見立て、自分は会ったことも話したこともない、おびただしい祖先たちの埋葬を想起した箇所。複数の層になっている筆筒の構造を地層に見立てながら、各時代の欠片も遺品として納めている。2011,3,11の実際の瓦礫が一番上部の配されている。

47 アイヌ乙女

リサイクルショップで手に入れた安物の北海道系土産物から、実際にかつて仙台平野にいたかもしれないアイヌ女性を想起(復元)して生まれた像。

48 おどが森の巨人(ダイダラボッチ)

41「小学4年生当時に描いた太白山の絵、太白山写真、オドガ森伝説」。47,48,49「神社後背部の巨人、アイヌ乙女、白蛇など」。

仙台中心部には大きさは小さいがピラミット型の特徴的な山がある。

伊達政宗が仙台平野にやってきて「太白山」と改名する前は、「オドガ森」と呼ばれていた。

現在でもここの神社は「生出が森神社」という名で、この付近は「生出」(おいで)という。この名前の由来の一つにはアイヌ語説がある。この地域にもかつてはアイヌ人が、あるいは蝦夷(エミシ)が住んでいたはずだ(この地域には縄文時代の集落が集中している)。

この「オドガ森」には巨人伝説がある(白い大蛇伝説もある)。

太白山・巨人伝説

おどが森(太白山)の頂上は、ごろごろした岩石で、むかし大男が腰かけたという大きな一枚岩がある。大男は、この大岩に腰をおろし、右足を名取市高館の吉田の田んぼに入れ、手を太平洋にのぼして、魚や貝をとって食べていた。大男は、ときどき村に出てきて、お百姓さんのしごとを助け、秋の忙しい稲あげのときなどは、何百人分もの稲束をはこんでくれたという。

海との関係、平野との関係が語られており、事実、海岸部からこの小山は目立ち、漁労関係者からは目印的な存在となってきた。

海岸部から仙台中心部を眺めるとこの太白山(オドガ森)と八木山(越路山)、青葉山(千躰仏)が並んで見え、視線を受け止めてくれる。もしかすると東日本大震災でも(あるいは政宗の時代の慶長奥州地震や、平安時代の貞観地震でも)津波から逃げる人々の視線の彼方にはこれらの山があったのかもしれない。「太白山」という伊達政宗が命名したらしい現在の呼び名は、このような土地の関係性、歴史性を封殺してしまっている。

49 おどが森の大蛇、石積み、生首

おどが森(太白山)には巨人伝説のほかにも大蛇伝説もある。荒ぶる大蛇を石によって封じ込め、大地の力を制御・コントロールするというイメージが投影されている。

このイメージは、青葉山の遊歩道を散歩中、へびに襲われ、小石の石積みにより封じ込めるといふかつて見た個人的な夢とつながっている。